

《教育・実践研究報告》

第14回 帝京大学教職大学院フォーラム～子どもを見つめて～ 子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは ～発達障がいのある学生からのメッセージをもとに～

魚山 秀介¹・坂本 和良¹・田中 良広²・藤井 靖史¹・小林 力³
・西川 幹之祐・西川 裕子

帝京大学大学院教職研究科¹・帝京平成大学児童学科²・府中市立若松小学校³

1 概要

1 はじめに

本教職大学院フォーラムは2009年の開設以来、一貫して「子どもを見つめて」というサブタイトルのもと、「教育と医療との連携」という本教職大学院の特色をそれぞれの教育課題に反映させたフォーラムをこれまで実施してきました。

特に昨今、特別支援教育を受ける児童生徒だけでなく通常の学級においても障がいがある児童生徒の数は増加傾向にあり、すべての教員が特別支援教育に関する知識と理解を深めることが不可欠となっています。そこで、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のため、学校教育の果たすべき役割があらためて注目されています。

そのような状況において、特別支援教育を担う教師の専門性の向上のための養成・採用・研修等について、教育委員会、学校、大学等の関係各位が取り組むべき方向性が示された「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告」(特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議)が令和4年3月31日に取りまとめられました。

そこで、今回のフォーラムは「子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは」をテーマとして、今年度から全ての院生が受講している前期・後期「リフレクション」科目と紐付けることで、院生・教職員が主体的に参画することを目的としました。

2 2022フォーラムの企画意図

今年度の企画担当者である魚山は、2022年2月に帝京ロンドン学園出身で本学法学部2年の西川幹之祐君さんが『死にたかった発達障がい児の僕が自己変革できた理由』を出版したとの話を本人から直接聞き、その本を読んで感銘を受けました。魚山は帝京ロンドン学園へ2016年から18年まで大学から管理職として出向しており、西川さんとは入試の面接を担当しただけで、入れ違いだったのですが、彼が海外の寮生活で苦勞していたことをロンドン学園教職員から聞いていたので、発達障がい児であった彼自身がどのようにして自己変革してきたのか、を今年度フォーラムのテーマとしてはどうかと認識し始めました。

そこで、2022年4月に今年度フォーラム担当の前島、杉山先生にその旨を伝えて同意を得、その後、坂本研究科長代行の許可を得て共通研究費で上掲書を院生・教員分を購入して前期の「リフレクション」科目における共通テキストとして使用することで、今年度フォーラムについての理解をはかりました。

そして、西川さんだけでなく西川さんのお母様、「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議」メンバーであった帝京平成大学・田中良広教授、本教職大学院・藤井靖史教授、本教職大学院OBで府中市立若松小学校・小林力校長にもご登壇頂き、「子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは」について具体的に討議をおこ

なう企画を意図しました。

3 参加者の人数、意見・感想

フォーラム当日の2022年11月26日（土）、対面形式のみとし、参加者は東京都、神奈川県、千葉県などから計85名（来場者53名、大学院教員14名、学生18名）でした。

参加者アンケートの項目「本教職大学院への理解が深まったか」について、約9割以上の肯定的回答を得ました。また、以下の御意見、御感想を戴きました。

【小学校教員の方より】

①当時者の話を伺えたのが収穫です。お母様のお話は実に深かったです。ありがとうございました。今回のフォーラムの理論はよくわかりました。後は実践。言うのは簡単です。私のモットーは「楽しく」です。自分自身が楽しく仕事ができるよう（ただ実際は忙しくて辛い日々ですが）がんばります。

②西川さんのお母さまのお話しがとても参考になりました。ありがとうございました。

③教職大学院の院生卒業者です。そのころからリフレクション（内省）を大切にしている場所でした。私はその頃はリフレクションが苦手でした。自信がなかったので、自分の考えを伝えたときに、班の人に批判されるのではないかと不安でした。卒業した今では、内省の意味がようやく分かってきました。特別支援の研修を受けるたびに「自分もこういうことがあったな」と思い出し、少しずつ自分の怒りや願いが整理されていきました。そこから、自分の内省ができるようになっていきました。義務教育は、新しい知識を学んだり、技能を身に付けたり、人のことを考えたりすることばかりです。私は自分のことを振り返ることを仕事に就いて始めて行いました。そこから自分も他の人も受容することができるようになりました。また、自分の気持ちに察することが出来るようになりました。自分を認められると、人を認められます。教員も人間で、内省をして自分の気持ちにアンテナを張る。そこから全員を認める学級運営ができると思いました。

④貴重なお話ありがとうございました。西川さんの

話は今までの自分を振り返ると心に刺さります。最後の西川さんの「特別支援学級の考えはなくなっていいのではないか」その通りだと思います。個別最適な学びにはそのことも含まれているのかと思います。そのためには学年制も変わっていかなくてはと思います。35人学級が進んでいますが、35人の児童を2～3人の教員が必要ではないかと思います。話の中で「政令市と県では・・・」とありましたが、文科省と財務省の壁が低くなればいろいろなことができそうです。

⑤本日のフォーラムに参加させて頂きありがとうございました。話を聞きながら、沢山の児童、保護者、先生方の顔が浮かんできました。特別支援を推進していく為に自分ができていることを考えることができました。私は特別支援コーディネーターという立場なので、先生方に今日、学んだ事を発信していきます。

⑥パネルディスカッションの際の西川さんのお母様の言葉が沁みました。18歳のこの子を考えてみましょう、という言葉で考え方が変わった、という具体。今まで自分自身もおうちの方と一緒に支援を考える際に使ってはいたけれど、本当の意味で、目の前から将来へと視点が変わられた、というお話をぜひ本校の職員や保護者の方々と共有したいと思いました。西川さんのお母様にご講演いただいたり、研修にご参加いただいたりすることはできないでしょうか。保護者の方にとっては心強い先輩ママであり、代弁者、通訳になっていただけたらと思うのです。

【中学校教員の方より】

①教職大学院を修了して10年近くになりましたが、機会があれば、また大学院で学びたいと思いました。どの方の話も、非常に参考になりました。

【教育委員会の方より】

①医療との連携という新しい視点をいただくことができました。教職大学院生の御発表も、皆さんのエネルギーを感じて何か一つでも動いてみようと思いました。西川さん、先生方ありがとうございました。

②シンポジウムに登壇されたお一人お一人の想いが伝わってきて、とても感動しました。「子どもを見つめて」がテーマとして継続されていることの重みを改めて感じました。今日は本当にありがとうございました。

いました。

③発達障がいのある当事者とご家族のお話から、異なった視点で見ることの大切さ、チーム学校に当事者が入ることの意義を感じた。今回に関しては、著作を読んでいることが前提の討議になっていて、当方の準備不足から、乗り遅れた感も否めなかった。主催者、当事者の意を汲んだ理解ができていなかったらごめんなさい。

【特別支援学校教員の方より】

①発達障がい当事者の話を聞いて良かった。私も帝京の法学部卒なので、西川さんが気になった政令指定都市と都道府県との関係を、3年生からのゼミで研究されるのを期待しています。政令指定都市って、政令で都道府県と同じ権限を指定した市なので、同じ権限で対等だと二重行政になりやすいのですよね。

(魚山 秀介)

4 2022 フォーラムの意義

研究科長代行 坂本和良

ここ数年、新型コロナウイルスによる感染者拡大の中、多くの教育活動が停滞してきました。そういった中で、今年度こそは通常の教育活動を計画通り進めていくことができるのではないかという教育関係者の期待とともに、2022年度がスタートしました。しかし、その期待も空しく夏以降第7波が日本国中を席卷し、8月末現在での累積陽性者数が200万人に届こうとしています。今後の感染者数の推移においても決して予断を許さない状況が続いています。こうした状況下において、各学校では万全の感染予防対策のもと、模索しながらも学校が本来の姿を取り戻しつつあります。教員をはじめ多くの教育関係者の皆様の、子どもたちの学びをとめない、コロナ禍であっても教育の質を落とさない、といった積極的な姿勢に心より敬意を表します。帝京大学教職大学院においても、一昨年度の全国一斉休校措置が解除されてから一月後には対面での授業を再開しました。今年度も当初より対面での授業を実施し、実習校等のご協力の下これまで通りの教育活動を展開しています。

(1) 教職大学院フォーラムの位置づけ：日頃の教育実践や研究成果の公開と院生の教育の一環

本教職大学院では、開設初年度より、日頃の教育実践や研究成果を広く公開する場を設け、そこでの成果をその後の教育や研究に生かすため、多様な事業を行ってきました。フォーラムの開催はその取り組みの一環として重要な位置づけとなっております。これまでと同様に、大学院生、教職員が総がかりで関わり、大学院生の実践的な学びの機会ともなっています。

これまで、フォーラムの主題は一貫して、学びの主体である「子ども」に焦点を当て、本大学院の特長や時々の教育課題との関連を重視して設定されてきました。今回は「子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは」を主題とし、本学法学部に在籍中の西川幹之佑さんの著書を題材に、基調講演、発表、パネルディスカッション等により構成することとしました。基調講演では、「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議」での議論をもとに「特別支援教育に関わる教師の専門性向上に向けた方策」について提言をいただきます。その後の協議では、今年度在籍している大学院生による発表や、現職の管理職として活躍している本教職大学院の修了生等によるパネルディスカッションを予定しています。著者である西川幹之佑さんとそのお母様の西川裕子様にも参加いただき、意見を交換していただきます。

特別支援学級の現状

この10年間で義務教育段階での児童生徒数は減少している一方、特別支援教育を受ける児童生徒数はほぼ倍増しています。特に、2019年度に小・中学校の特別支援学級に通級による指導を受けている児童・生徒数は2009年度の2.5倍であり、2021年度に固定の学級で指導を受けている児童・生徒数は平成23年度の2.1倍となっています。そうした在籍児童・生徒数の急増に応じて、指導にあたる教員数も増加はしていますが、特別支援学級（小・中学

校) 担当教員で、小・中学校教諭免許状に加え、特別支援学校教諭免許状を保有している割合は2020年度で31.2%という実態であります。

特別な指導を必要としている児童・生徒の障がいの種別も程度も多様化し、個々の指導もそれぞれの実態に応じて行う必要があることを考えると、現場の先生方が日々の児童生徒との関わりの中で、様々な問題に直面しているであろうことは想像に難くはありません。

『死にたかった発達障がい児の僕が自己変革できた理由』

本フォーラムのテーマの元となった著書のタイトルです。とてもインパクトのある表現ですが、本書を読んでいくうちに、著者である西川さん固有の話題ではなく、障がいのある子どもたちすべての意見を代弁しているといえることに気付き、気持ちが揺さぶられた読者も少なくないのではないかと拝察いたします。

我が国の子どもたちは諸外国の子どもたちと比べて、自己肯定感、自尊感情の低さが問題視されて久しくなりますが、本著の冒頭の小見出しである、「故障だらけの『不良品』に生まれて」は、まさに自分自身をこのように表現しなければならなくなった西川さんの苦しみや、これまで蓄積された辛い体験が凝縮されたものであり、本著ではこれまでなかなか知る機会が少なかった当事者としての本音を、本人の言葉で知ることができました。本教職大学院フォーラムでは、「子どもを見つめて」とサブタイトルを常につけているように、子どもたちの姿をもとに考えることを基本としています。自分の気持ちなどを表現するのが苦手な障がいのある子どもたちは、どのような思いで学校生活を送っているのだろうか、教師や保護者の言動が子どもたちの心を傷つけていることはないのだろうかなど、日頃障がいのある子どもたちの指導に当たる教師が、子どもたちの本音や立ちまはだかる壁の存在を知る機会でもあります。

少し長くなりますが、障がいのある子どもたちを目の前にしている誰もが心にとどめてほしい文を引用させていただきます。

「親も先生もクラスメイトも、周りの人たちは発達障がいの僕に怒り、ひどい言葉を投げつけてきました。思い通りに動かないし、目を見ないので聞いているのかどうか分からない、言葉が返ってこない、怒られてもすぐに忘れたように多動する、謝れない。そんな僕にいらいらするのは理解できます。

でもあなたたちが怒っている原因は、本当に僕がつくったものなののでしょうか。もしかしたら、ストレス発散のはけ口として、目の前にいて反論ができない発達障がい児をサンドバッグがわりにしていませんか。・・・(中略)・・・本当に解決しなくてはならない問題があるのに、目を避けるべきではないです。一度しっかりと考えてほしいです。」

最後に、基調講演をお引き受けいただきました帝京平成大学教授の田中良広先生、シンポジストをお引き受けいただきました修了生、ご後援、ご協力いただきました多くの教育委員会、当事者として真摯に取り組んでくれた院生の皆さん、そして今回のフォーラムに著書の活用をご快諾いただいた西川幹之佑さんやお母様の西川裕子様にご心より感謝申し上げます。



研究科長代行 坂本 和良

Ⅱ 基調講演

「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議」報告（令和4年3月）における「特別支援教育に関わる教師の専門性向上に向けた方策」について

帝京平成大学 教授 田中 良広

上記検討会議の委員を務めた田中良広氏に「特別支援教育に関わる教師の専門性向上に向けた方策」が決定されるまでの具体的な議論の内容などについてご説明いただきました。

また、校長が任命する特別支援教育コーディネーターについて、全小中高校で配置されるべきだとした上で、「特別支援教育コーディネーターとしての役割を果たせる人材を（各学校で）充てられているか」といふとまだまだ」と述べ、コーディネーターを担える教員の育成にも力を注ぐべきとする考えを示しました。

さらに、特別支援教育に関わる教員の意識改革も必要だとした。教師が期待して接すると生徒の成績も上がるというピグマリオン効果（教師期待効果）に言及し、「障がいのある子どもたちに教員は期待しているだろうか」と問いかけ、「期待していると児童・生徒に伝えることが大事だ」と述べました。



帝京平成大学教授 田中 良広氏

 TEIKYO

第14回 帝京大学教職大学院フォーラム
～子どもを見つめて～

「特別支援教育を担う教師の在り方等に関する検討会議」報告

帝京平成大学
田中 良広
yoshihiro.tanaka@thu.ac.jp

 帝京平成大学

本日はお話しすること

1. 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議の概要
2. 教師の専門性向上のための具体的方向性
3. 我が国の課題と今後の在り方
4. 求められる意識改革

 帝京平成大学

1. 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議の概要

 帝京平成大学

1/2

検討会議の概要

○ 検討会議開催の背景

- ・ 特別支援教育を受ける幼児児童生徒の増加
- ・ 全ての教師に特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に対する理解等を求める必要性(有識者会議報告)
- ・ 特別支援学級、通級による指導担当者等の専門性の向上（自立活動の指導、発達障害への対応等） cf.教育職員免許法
- ・ 概ね全ての特別支援学校教員が免許状を取得していることを目指す必要性

インクルーシブ教育システムの理念の構築による共生社会の実現

 帝京平成大学

検討会議の概要

2/2

○ 検討事項

- (1) 特別支援教育を担う質の高い教職員集団の在り方
- (2) 特別支援学校教諭免許及びその教職課程コアカリキュラムの在り方
- (3) その他関連事項

○ 実施方法

- ・ コアメンバー(11名+オブザーバー1)によるWeb会議

○ 開催期間

令和3年10月～令和4年3月31日

○ メンバーの構成

各障害の代表、全国特別支援学校長会、全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会、都道府県教育委員会代表



1. 全ての教師に対し特別支援教育の知見や経験を蓄積するための組織的対応

<具体的方向性> (つづき)

- 任命権者及び校長は、主幹教諭、指導教諭及び管理職のキャリアパスとして、特別支援学級担任、通級による指導の担当や特別支援教育コーディネーター等の特別支援教育に関する経験を組み込むよう配慮すること。

- 任命権者及び校長は、採用時からキャリアに応じて、特別支援教育について当該教師の育ちと学びを関連付けて支える仕組みを構築し、積極的にキャリアに応じた研修を実施・推奨すること。その際、国立特別支援教育総合研究所の学習コンテンツ等も活用すること。



検討会議における協議事項

○ブレインストーミングによる現状分析

○ 洗い出された課題と対応方針

- (1) 特別支援教育を担う教師の養成・採用・研修等の在り方

- ・ 養成関係
- ・ 採用関係
- ・ 研修
- ・ 体制整備、キャリアパス、人事交流

- (2) 特別支援学校教諭免許状コアカリキュラムの在り方

- ・ 基礎免許状コアカリキュラムとの関連を図ること
- ・ 知的障害教育における各教科等、自立活動、重複障害者等の取り扱い、発達障害を位置付けること



2. 特別支援学級、通級による指導を担当する教師の採用、配置、人事交流、特別支援教育コーディネーターの在り方

<具体的方向性>

- 教育委員会は、大学と連携し、大学における特別支援教育に関する単位の取得状況や、特別支援教育に関わる体験やボランティア、特別支援教育支援員等の経験について、採用選考において考慮すること。

- 教師の育ちと学びを関連付けて支える仕組みを構築すること。その際、特別支援学校教諭免許状の取得に向けた免許状認定講習等を学びの機会として活用すること。

- 校長及び教育委員会は、特別支援学級や通級による指導におけるキャリアを積み、特別支援教育の中核として活躍する教師と、通常の学級も経験しながら全体的な学校経営の経験を積む教師とを計画的に育成する等の視点を持って人材育成を行うこと。



2. 教師の専門性向上のための 具体的方向性



3. 特別支援学校の教師の免許保有率の向上、人事交流推進、センター的機能、特別支援教育コーディネーターの充実

<具体的方向性>

- 各特別支援学校の設置者は、必要な領域を定めた特別支援学校教諭免許状を有しない教師を特別支援学校に配置しようとする場合においては、原則、① 当該教師の前任校が小学校等の他の学校種又は他の障害種を対象とする特別支援学校であるとともに、② 配置しようとする障害種の特別支援学校の教師として必要な特別支援教育領域の特別支援学校教諭免許状を取得する計画がある者に限ること。

- 国は、教育委員会における特別支援学校教諭免許状取得に向けた優れた取組(免許取得計画の作成や単位修得状況の把握等)を展開すること。

- 教育委員会が、小中学校等と特別支援学校の人事交流について、目的を明確化するとともに、それに応じて人事交流期間を柔軟に設定すること。また、人事交流期間中及び後の特別支援学校教諭免許状の取得を目指した計画の進捗状況を把握し支援するなど、目的の達成に向けた工夫を講ずること。



1. 全ての教師に対し特別支援教育の知見や経験を蓄積するための組織的対応

<具体的方向性>

- 校長は、校内の通常の学級と、特別支援学級、通級指導教室、特別支援学校との間で、交換授業や授業研究をするなどして、特別支援教育経験者を計画的に増やす体制の構築に努めること。

- 任命権者及び校長は、全ての新規採用教員がおおむね10年目までの期間内において、特別支援学級の教師や特別支援学校の教師を複数年経験することとなる状態を目指し、人事上の措置を講ずるよう努めること。合わせて、採用から10年以上経過した教師についても、特別支援教育に関する経験を組み込むよう努めること。

- 特別支援学級への担任配置にあたっては校長の適切な人事マネジメントにより、特別支援学級において年間を通じて責任をもって特定の教科の授業を担当させることとするなど、必要な経験が得られるよう努めること。



3. 特別支援学校の教師の免許保有率の向上、人事交流推進、センター的機能、特別支援教育コーディネーターの充実

<具体的方向性> (つづき 1)

- 特別支援学校の校長及び特別支援教育コーディネーターは、地域の状況やニーズを踏まえ、積極的にセンター的機能を果たすことができるよう、日常的な状況把握や支援の充実に努めること。

- 各設置者及び校長は、センター的機能を効果的に発揮することができるよう、小中学校等における状況を理解し、外部専門家や関係機関とも連携しつつ、効果的な支援ができる者を配置すること。

- 各設置者及び学校は、特別支援教育コーディネーターに対する効果的な研修を実施すること。その際、国立特別支援教育総合研究所の学習コンテンツ等も活用すること。

- 国は、小学校等における特別支援教育コーディネーターの状況も踏まえ、特別支援教育コーディネーターの法令上の位置付けを検討すること。



4. 大学の資源の有効活用による教職課程の充実、教育委員会との連携による実践力の養成等

<具体的方向性>

- 大学は、国内の地域ブロック単位で、大学の資源を相互に活用・共有し、特別支援学校教諭免許状の5つの障害領域を計画的に取得できるような取組を推進することが望ましいこと。具体的には、例えば、単位互換制度や遠隔メディアシステムを活用した授業による履修などによる単位取得を可能とする大学間の体制の整備や取組が考えられること。
- 大学は、地域の教育委員会と連携しつつ、特別支援学校教諭免許状等の教職課程において、特別支援学校の学校経営・運営の具現化に携わってきた指導主事、特別支援教育コーディネーター、学校長等の経験者の実務家教員のうち業績のある者を大学教員として積極的に登用し、学校現場のニーズに即した具体的な指導の充実を推進すること。
- 大学は、実務家教員の任用に当たっては、教育委員会との協定等により現職教員等の人事交流等を行うことも検討すること。



3. 我が国の課題と今後の在り方



4. 大学の資源の有効活用による教職課程の充実、教育委員会との連携による実践力の養成等

<具体的方向性> (つづき 1)

- 大学は、特別支援学校教諭免許状や小学校等免許状の教職課程における教育実習においては、指導教員が学生を適切に指導することをはじめ、実習校と密に連携して運営を行うこと。
- 大学は、教職大学院における現職教員を対象とした課程において特別支援教育を位置付け、教育委員会や学校のニーズも踏まえつつ、全ての対象者が実践的な特別支援教育に関する知識を得られるようにすること。
- 大学は、特別支援学校教諭の教職課程のみならず、小学校等の教職課程においても、特別支援教育に関する科目等の充実を図るとともに、これらの学生の学びを十分に保障すること。特に、特別支援学校教諭免許状の教職課程コアカリキュラムのうち、自立活動に関する内容を含む授業や、発達障害領域を取り扱った授業等を優先して学びを深めることを求めたり、該当授業科目の単位の修得を推奨すること。さらに、教員養成大学・学部を中心に教職課程の内外で特別支援教育に関する新たな科目の開発や履修の促進を積極的に図ること。



理解するためのKey Word

インテグレーション (integration)

インクルージョン (inclusion)

合理的配慮 (reasonable accommodation)

アコモデーション: 変更 (accommodation)

モディフィケーション: 調整 (modification)



4. 大学の資源の有効活用による教職課程の充実、教育委員会との連携による実践力の養成等

<具体的方向性> (つづき 2)

- 教育委員会や大学においては、特別支援教育に関わる魅力の発見や動機付けのための方策として、中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会」の検討を踏まえ、下記に取り組むこと
- 教育委員会や大学においては、特別支援教育に関わる魅力の発見や動機付けのための方策として、中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会」の検討を踏まえ、下記に取り組むこと。
 - ・ 小学校等教諭免許状の教職課程における教育実習時に、特別支援学校や特別支援学級での実施も可能であることを踏まえ実習計画を検討すること。
 - ・ 小学校等教諭免許状の教職課程とは別に実施する介護等体験の実習先として特別支援学校のほか、特別支援学級等での実習を積極的に行うことなどを推進すること。



インテグレーションとインクルージョン

Integration (統合)

障害のある子どもと障害のない子どもを一緒の場で教育しようとする考え方

Inclusion (包容)

障害の有無に関わりなく全ての子どもを含めて教育しようとする考え方



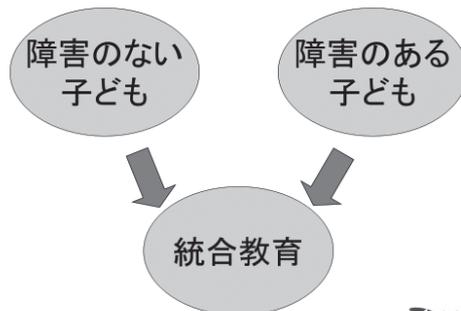
4. 大学の資源の有効活用による教職課程の充実、教育委員会との連携による実践力の養成等

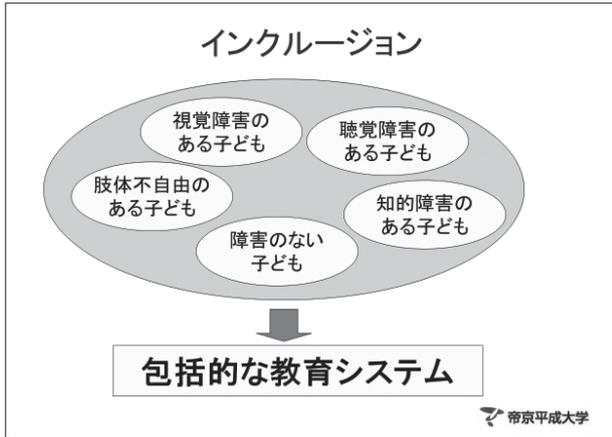
<具体的方向性> (つづき 3)

- 国、教育委員会及び大学においては、大学の教職課程の内外を通じ、学生段階から特別支援教育に関する資質能力を向上するための先進的な科目設定やカリキュラムを促進するとともに、優れた取組事例の収集と好事例等の周知を行うこと。



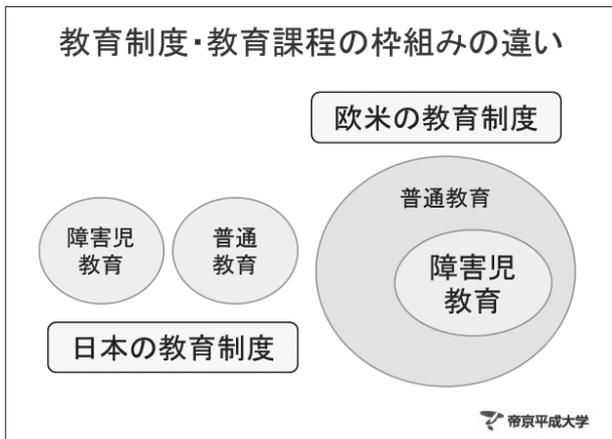
インテグレーション





4. 求められる意識改革

帝京平成大学



「対岸の火事」のような捉え方

逆ピグマリオン効果

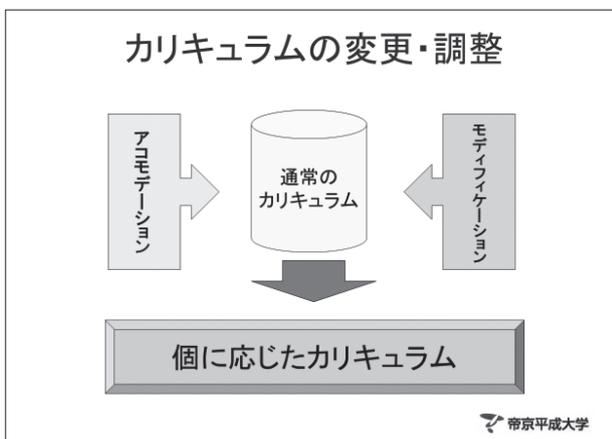
帝京平成大学

アコモデーションとモディフィケーション

○アコモデーション (accommodation)
障害のある子どもが学習内容を理解したり、与えられた課題に取り組んだりする際に、障害の状態等に応じて学習環境や内容のフォーマット等に変更を加えること。(アクセシビリティを保障する)
例) 手話通訳、音声読み上げ、テスト時間の延長等

○モディフィケーション (modification)
学習内容の全てを理解することが難しい子どものために、カリキュラムに(質的な)変更を加えること。
例) 通常の学級で学んでいる知的障害のある子どものために、易しい課題にしたり、単純化したり、減らしたりすること

帝京平成大学



フォーラム会場

Ⅲ 本研究科学生による発表

西川幹之祐さん・著書をふまえた「子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは」

【報告者】

1班 (中島 武氏 スクール・リーダーコース)



2班 (小林 翔太氏 スクール・リーダーコース)



3班 (竹原 由美子氏 スクール・リーダーコース)



4班 (原田 真里江氏 スクール・リーダーコース)



本教職大学院において全員生が履修する科目である「リフレクション」で討議した内容について、各班ごとに代表者がプレゼンテーションをおこないました。前期から西川幹之祐さんの著書を共通テキストとして全ての教員、院生が読みながら議論を交わし、それぞれの立場から「子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは」について考察をおこない、児童・生徒や保護者の立場になってこれまでの教育活動を振り返ることができる契機となりました。

Ⅳ パネルディスカッション

西川幹之祐さん・著書をふまえた「子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは」について

【登壇者】

小林 力 府中市立若松小学校校長

藤井 靖史 本学教職研究科教授

西川 幹之祐 『死にたかった発達障がい児の僕が自己変革できた理由』 著者

西川 裕子 保護者

田中 良広 帝京平成大学教授

【コーディネーター】

魚山 秀介 本学教職研究科教授

<登壇者プロフィール>

小林 力 (こばやし りき)

府中市立若松小学校校長。東京都出身。東京都立国立高等学校、千葉大学教育学部教育学選修卒業後、平成12年度より東京都公立学校教諭、主幹教諭。現職期間中に帝京大学教職大学院に派遣(第一期生)。平成22年度より新宿区教育委員会指導主事、平成26年度より同統括指導主事、平成30年度より同主任指導主事を経て、令和2年度より現職。それぞれ読字障がい、書字障がいのある2児の父。府中市立若松小学校の経営理念は「子どもの『学びたい』をはぐくみ、かなえる若松小～すべての関係者の主体性により実現する～」。学習障がい等の有無にかかわらず学習に困難を感じている児童が自分に合った学び方を見付ける等、すべての児童にとっての“個別最適な学び”の実現を目指している。



小林 力氏

藤井 靖史（ふじい やすし）

帝京大学大学院教職研究科教授・同医学部小児科臨床准教授。1986年、福井医科大学（現福井大学医学部）卒業、福井医科大学医学部附属病院小児科研修医、田付興風会北野病院小児科助手、福井医科大学医学部小児科助手、リューベン大学研究員を経て、1998年帝京大学医学部小児科助手、同講師を経て、2008年帝京大文学部教育学科教授・同医学部小児科臨床准教授、2009年から同大学院教職研究科教授・同医学部小児科臨床准教授で現在に至る。日本小児科専門医、小児神経専門医。帝京大学幼稚園医。



藤井 靖史氏

藤井 靖史氏

西川 幹之佑（にしかわ みきのすけ）

2002年、新潟県三条市生まれ、東京育ち。幼稚園中退。千代田区立麴町中学校、英国・帝京ロンドン学園卒。現在、帝京大学法学部政治学科2年生。ADHDとASD傾向、学習障がいのため小学校2年生まで特別支援学級に在籍。その後通常の学級に転籍したものの学習面・社会面で壁にぶつかり、生きる意義を見失い小学校3年生で死を考え始める。小学校卒業後、当時麴町中学校校長であった工藤勇一氏に出会い、「自律」という考え方を学び人生が一変する。コロナ禍で将来について考えるうちに、自分のように苦しむ発達障がい児の役に立てることがあると考え、『死にたかった発達障がい児の僕が自己変革できた理由』の執筆を企図した。

西川 裕子（にしかわ ひろこ）

新潟県三条市生まれ。高校3年時に母の看病のため大学受験を断念。母の回復に伴い、都内予備校の寮に入りながら受験をする。駒澤大学法学部法律学科卒。夫は渉外弁護士の西川高幹氏。2002年に長男

の幹之佑が誕生。ADHDとASD、LDという特性を持つ息子の子育て、元麴町中学校校長・工藤勇一先生や西松クリニック・西松能子先生、帝京大学教授・魚山秀介先生との出会いなどを通じ、特性のある子どもへの理解を深める。2023年春に幹之佑さんと共に特性のある子どもの子育てについて当事者目線で振り返る自著を出版予定。



西川幹之佑・裕子氏

質疑応答・協議

藤井靖史氏は、医学の立場から発達障がい支援についてコメントをおこない、発達に特性があるからといって障がいではないと主張しました。小林力校長は障がいのある児童・生徒への指導の現状を発表し、教員には「児童・生徒と関わる中で抱く違和感に目を向けることが必要であると強調しました。また、発達障がいの当事者である帝京大学法学部生の西川幹之佑さんとその母・裕子さんも登壇し、それぞれの立場から「子ども一人ひとりの多様性に応じられる教師の専門性とは」について具体的について発表しました。

フロアからは「今後の特別支援教育について必要なことを各自1つ挙げてください」など、具体的な質問が寄せられ、活発な質疑応答や協議がおこなわれました。

IV おわりに

昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、対面とオンラインというハイブリッド方式での実施でした。しかし、今年度は可能な限り教職員や院生が当日のフォーラムの基調講演やシンポジウムを視聴できることを目的として対面形式のみとしました。

また今年度は昨年度と同様に来場者の方には、2日前に感染症対策のお願いのメールを送信し、当日は受付でアルコール消毒後、検温と体調を確認し、検温・健康確認表を記入していただき、登壇者の間はアクリル板を設置し、来場者は間隔を空けて着席していただきました。間隔を空けての着席来場者・登壇者共に、参加後に感染が判った場合や感染者と接触があった場合は大学に申し出るよう連絡先を渡し、会場で司会より再度お願いするなど感染症対策の徹底を継続しました。

この様な対策が可能になった要因として、最後の挨拶で小山先生が述べられていた様に、高橋、粕谷、辻田さんをはじめとする本学事務職員の方々のご協力が挙げられます。

なお例年、フォーラム終了後に開催している情報交換会は残念ながら諸事情により実施中止となりました。修了生と在籍院生、現役教員、教員OB・OGとの交流の場として貴重なプログラムの一つですので、次年度は是非、再開してお互いの情報共有を深められればと思います。

あらためて、今回の教職大学院フォーラムにご協力いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。



受付



会場

(魚山 秀介)